

## 瀬戸内海国立公園の父 小西 和の主な功績

山本 一伸（さぬき市教育委員会 生涯学習課文化財係）

[本城先生]

午前中の最後の話になります。山本一伸先生から「瀬戸内海国立公園の父 小西<sup>かなう</sup>和の主な功績 平成26年度 さぬき市歴史民俗資料館企画展より」ということで話をさせていただきます。

山本先生、よろしくお願いいいたします。

[山本先生]

### 瀬戸内海国立公園の父 小西和の主な功績

～平成26年度 さぬき市歴史民俗資料館企画展より～

私はさぬき市教育委員会 生涯学習課の山本と申します。どうぞ、よろしくお願いいいたします。私の職場は大川町にあります「歴史民俗資料館」です。歴史民俗資料館はみろく公園の中にあり、主な展示品としては、平成25年に国の史跡指定された、うのべ山古墳を含む津田古墳群や、平成5年に史跡指定された富田茶臼山古墳を含め、考古資料や民具等

約1万点を収蔵展示しております。機会があれば、お越しください。

ただ今から小西<sup>こにしかなう</sup>和さんの主な功績について紹介をさせていただきます。昨年、本市の歴史民俗資料館で企画展示をすることになった経緯を紹介します。小西和さんがさぬき市出身であるということと、そのご子息である旧長尾町長を務められた小西<sup>きんや</sup>欣也さんが地元の宇佐神社に海南文庫として所蔵していた小西和さんの遺品、約650点の資料を平成18年にさぬき市に寄贈されていたということ。そして、昨年、瀬戸内海国立公園が指定されて80周年になるという記念の年ということで、「瀬戸内海国立公園の父」として企画展示をさせていただきました。企画展示の期間は当初、今年の8月から1カ月の予定でしたが、ご好評をいただき、もう1ヶ月間延長させていただいた次第です。その間、延べ1千人の方々にご覧いただきました。

企画展示に当たりましては、いろいろな方々にご教示・ご指導を賜りました。ここで改めて、お礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

これから小西和さんの主な功績を紹介させていただきます。小西和さんは1873年、明治6年4月26日に今の長尾町にお生まれになりました。幼少の頃は和太郎わたろうという名前でした。そして、昭和22年11月30日に74歳でお亡くなりになりました。

小西和さんは74年の生涯を北海道開拓に尽力されたということや瀬戸内海国立公園の指定に尽力されたことなど、皆様方にいろいろ評価をされておりました。しかし、具体的にどのような取り組みをされていたのか、私自身、あまり理解できておりませんでしたので、企画展示をしていく中で、収蔵している資料を調べたり、お話を伺ったりして、まとめさせていただきました。いろいろな観点があろうかと思いますが、小西さんの生涯につきまして、私の方で5つの観点に分けさせていただきました。

まず、第1章北海道にける夢。第2章ジャーナリストとして再生を誓う。第3章瀬戸内海の研究に没頭。第4章国会議員としての使命。第5章文化人としての活動。誕生から74年の生涯を5つの時期に分けて、紹介させていただきました。

小西さんと主に交流のあった人物ですが、小西さんはお父さんの弥七郎さんとお母さんのトラさんの次男としてお生まれになりました。しかし、お兄さんが生後間もなく亡くなられたので、小西さんが小西家の長男として、小西家を率いて生きて行くわけでございます。そして、弟の太郎さんと一緒に北海道開発に尽くされるということです。もう一人の弟の隆たかしさんは宇佐神社の宮司になられて、のちに小西神社を北海道の方にお祀りするという経緯がございます。

あと、香川県県会議員を務め、のちに第1回目の衆議院議員となった叔父の小西甚之助じんのすけさんが小西さんの北海道開発の強力な支援者として、尽力されました。

当時は一県一校のため、小西さんは松山の今でいう高等学校に進まれます。そこに札幌農学校、今の北海道大学出身の山下敬太郎先生がおられて、小西さんは北海道の農業開拓について、先生から強い影響を受けました。それが北海道に行くという志を立てたきっかけになりました。

それから新渡戸稲造さん、有名な方でございますけれども、札幌農学校に入り師弟関係になりました。そして、のちに瀬戸内海論を刊行した時、「瀬戸内海は世界の宝庫である」という非常に有名な序文の言葉をいただいた方でございます。



(小西 和 氏)

1873年(明治6)4月26日  
誕生(幼名 和太郎)

1947年(昭和22)11月30日  
永眠(享年74歳)

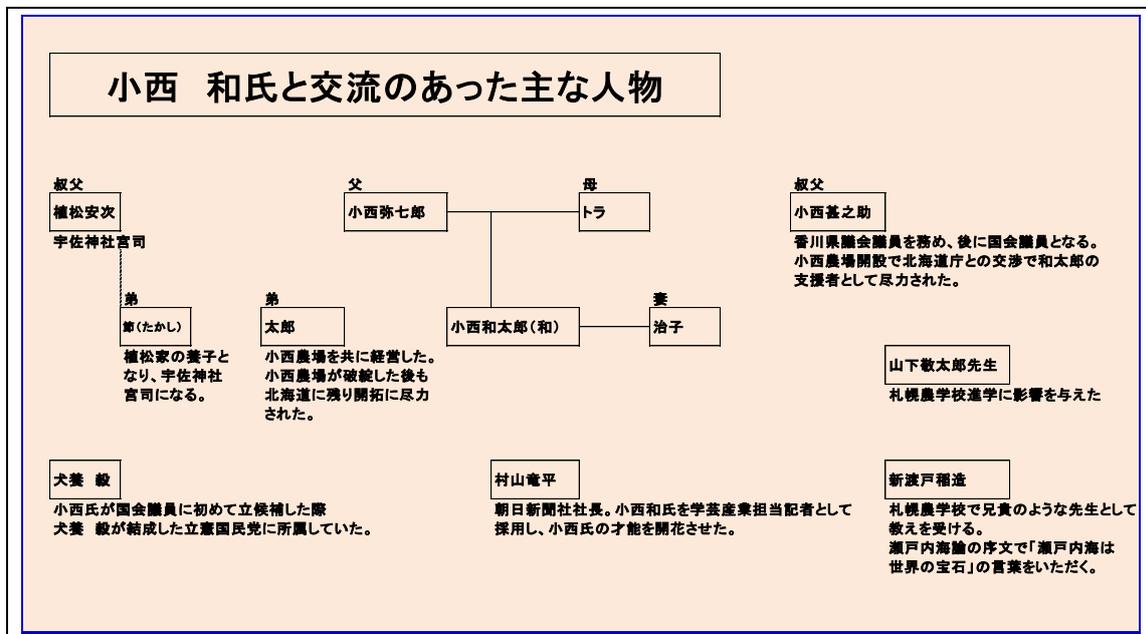
(主な功績)

瀬戸内海国立公園の父  
北海道開拓に尽力

- 第1章 北海道にける夢
- 第2章 ジャーナリストとして再生を誓う
- 第3章 瀬戸内海の研究に没頭
- 第4章 国会議員としての使命
- 第5章 文化人としての活動

朝日新聞社の村山竜平社長でございますけれども、小西さんの学芸の能力を見出して、「戦況報告と同時に農耕の開拓について先進地を調査してきなさい」ということで、小西さんの能力を開花させた方でございます。

犬養毅さんですけども、小西さんが初めて国会議員に立候補した時、犬養さんが結成



した立憲国民党に所属していて当選されました。犬養さん自身も書道の達人でして、小西さんも犬養さんと師弟関係にあり、書道にも精進されるという繋がりがあったようでございます。

## 第1章 北海道にける夢

(誕生～26歳頃)

第1章の北海道にける夢でございますが、ここでは主に誕生から 26 歳頃の小西さんの生涯の一端を紹介させていただきます。小西さんは明治 6 年に次男として生まれた後、15 歳になって、伊予尋常中学校、今の松山東高等学校に進むわけでございます。その当時まで香川県と今の愛媛県は 1 つの県として成立

しており、しかも 1 県 1 校のため、尋常中学校に進もうとすると松山に行かざるを得ませんでした。そこで、現松山東高校に入学します。今でこそ高速道路ができて、2 時間強あれば松山に行けますが、当時は鉄道も十分整備されておらず、松山に行くのに船で 2 日から 3 日ぐらいかかったという記

1873年(明治6) 4月26日	小西弥七郎・トラの二男として誕生(幼名 和太郎)
1888年(明治21)【15歳】	愛媛県伊予尋常中学校(現:松山東高)に入学
1889年(明治22)【16歳】	岡山尋常中学(現:朝日高)に転校
1891年(明治24)【18歳】	札幌農学校(現:北海道大学)予科入学 (9月～8月/予科1学年)
1892年(明治25)【19歳】	夏休みを利用して北海道一周旅行 旅行記を香川新報に掲載
1894年(明治27)【21歳】	札幌農学校を退学し、小西農場に専念
1896年(明治29)【23歳】	「和」と改名
1898年(明治31)【25歳】	大水害が発生。小作料未納や困窮者援助で負債増加
1899年(明治32)【26歳】	4月治子と結婚 12月農場経営が破綻し上京

録が残されているようです。

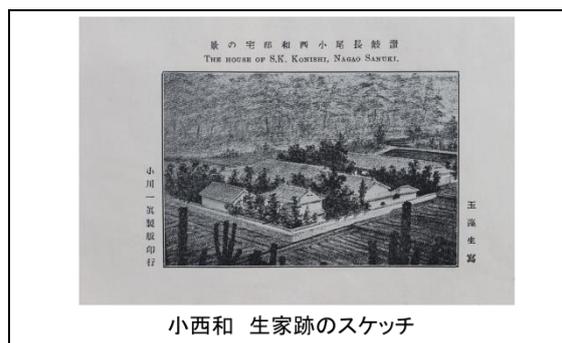
伊予尋常中学校に15歳で入学しましたが、交通の便が悪いということで、1年後に岡山県の岡山尋常中学、現朝日高校に転校します。転校した後、18歳で札幌農学校の入学試験を受け、無事合格して北海道に渡って行きます。入学した後、19歳の夏休みに北海道一周旅行に出かけます。その旅行記を62回に亘って彼自身が香川新報、今でいう四国新聞社に投稿しております。その内容が面白いということで連載されて、いまだに貴重な旅行記を伝える資料ということで残されております。

札幌農学校に進んで順調に学生生活を送って行きますが、4年生になる年に小西農場に専念するというので、札幌農学校を退学します。これまで、小西さんは北海道開拓をしたいということで1年生から3年生の間、平日、月曜日から金曜日に札幌で授業を受けて、週末になると今の岩見沢市の方に移動するというのを続けておりました。その移動距離は約40Kmでございます。今でこそ鉄道網が発達しておりますけれども、当時は移動するのに、グーグルマップで計算すると、徒歩で7時間ぐらいかかったようです。小西さんは平日に学生として勉強し、土、日になると、農業をするためにその間を移動するというので、非常にハードな生活を送っていました。しかし、結局、4年生になる年に小西農場に専念することが必要だということで退学します。

小西さんが23歳の時、明治29年に和太郎から和<sup>かなう</sup>という名前に改名します。そして、25歳になる年に札幌で大水害が発生します。その頃、農場の開拓が順調に進んでいましたが、水害等が発生したことと困窮者がたくさんおられたので、その方々に援助をしました。その援助者がだんだん増えていき、最終的に小西さん自身がその負債を背負うような形で農場経営が破たんして、上京せざる負えなくなりました。

小西さんの描いた夢は挫折しましたが、その志は今の岩見沢市、栗沢村の方々に小西さんの功績として称えられており、いまだに大事にされております。このあと、それをちょっと駆け足になりますけれども、資料を通じて紹介させていただきます。

これが小西さんの生まれた生家跡のスケッチでございます。場所はさぬき市の「ツインパルながお」のあたりです。今、生家の跡は残っていませんが、小西さんの資料を見て、このスケッチが残されています。



これが 15 歳の時の学生時代の日記帳と小遣帳でございます。小西さんが学生生活を送った様子が事細かく書かれています。ここの 9 月のところに山下啓太郎先生のお名前も見えており、山下先生とのやり取りが記述されております。

小遣帳につきましても、日々、何にいくら使ったということを、こと細かく記録されております。

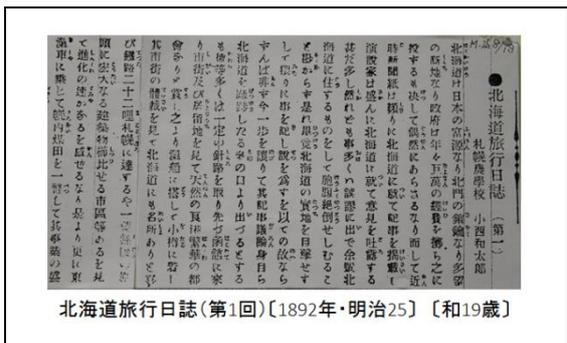
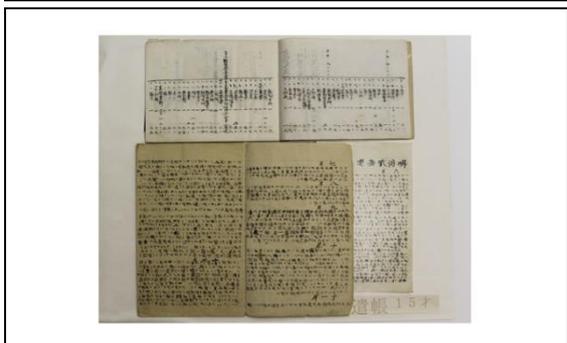
これを注目していただきたいのですが、日記帳の後ろに、岡山郷、松山、そして、作成年月日の西暦 1888 年、小西和太郎と書いています。今でいう書籍の奥付おくづけのようなものです。ご自分の日記ですが、書籍として意識されていたのか、15 歳ですけれども、このような学術的なセンスも垣間見ることができます。

これが 19 歳の時に北海道旅行をされた第 1 回目の日誌でございます。「北海道は日本の富源なり」と書いております。これを当時の四国新聞社に投稿しています。当時からマスコミ等を活用してやっていくという、小西さんの非常に長けた一端を垣間見ることができます。

小西さんが実際に開拓された場所が、この黄色のところを示しているあたりです。今は岩見沢市になっておりますが、当時は栗沢村でした。市町村合併までの間、長尾町の方でもこの栗沢村と交流を行っていました。小西さんが開拓された栗沢村は農業が非常に行きやすいという北海道の中心地でございます。札幌がここですから、小西さんは札幌と栗沢村との 40Km を学生の間、毎週頑張って往復していたということでございます。



日記帳、金銀入簿記[1888年・明治21]【和15歳】

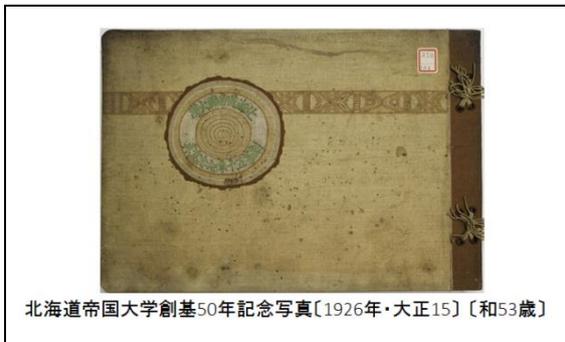


北海道旅行日誌(第1回)[1892年・明治25]【和19歳】

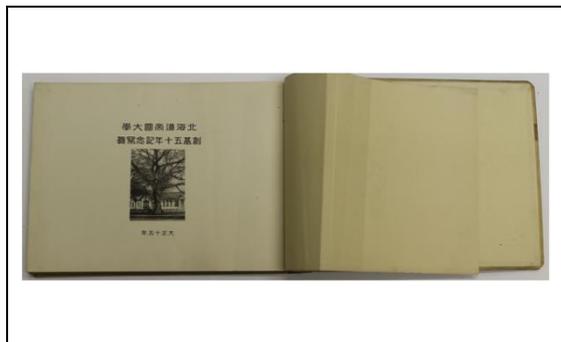


北海道地勢及鉱産図[1911年・明治44]【和38歳】

これが北海道帝国大学の創基 50 年を記念して、大正 15 年に作成された記念写真でございます。これを小西さんが 53 歳の時に北海道大学から寄贈されております。先ほど申しましたように、小西さんは 4 年生になる年に家事都合で退学してしまいますが、北海道大学から記念写真を贈られるということで、卒業生としての扱いを受けていたことがお分かりいただけるかと思えます。



北海道帝国大学創基50年記念写真【1926年・大正15】【和53歳】



それから、これは小西さんが 20 歳の時に小西農場を経営している様子でございます。左の馬に載っているのが小西和さんです。中央の白衣を着られた方がお母さんのトラさんです。このころは農場経営に燃えていた時でございます。



小西農場仮事務所 1893年 左馬上小西和 中央白衣母トラ  
小西農場仮事務所【1893年・明治26】【和20歳】

小西さんが実際にどれぐらい頑張ったのかということでございますけれども、最初、明治 26 年に 12 町歩であった開墾面積が、翌年に 63 町歩まで増えていることで、6 倍ぐらいに面積を増やしています。作物としても、きび、そば、小豆、とうもろこし等がありますが、とうもろこしに至っては数 10 倍の面積に広げて収穫量を上げています。このように、この資料から小西さんが非常に頑張ったということをお分かりいただけると思えます。

《別表》小西農場での「開墾進捗状況」	
1893年 (明治26)	12町歩 (119,004㎡)
1894年 (明治27)	63町歩 (624,771㎡)
(農沢町史より)	

《別表》小西農場での「小作物と収穫量」				
収穫年	作物と収穫量 (単位: 石)			
	そば	小豆	とうもろこし	
1893年(明治26)	1,335	1,740	2,397	1,214
1894年(明治27)	3,163	4,840	23,555	30,965
(農沢町史より)				

「開墾進捗状況」、「作物と収穫量」【和20、21歳】

こちらが小西神社でございます。この写真はたまたま佐々木明美さんという方が北海道の小西神社に行かれておられまして、丁度、企画展をする時に、「この資料をお使い下さい」ということで、ご提供いただきました。改めてお礼を申し上げます。

その小西神社。これが最近の神社でございますけれども、先ほどご紹介いたしました、宇佐神社から分霊をお祀りしております。御祭神は天照大神と八幡大神です。郷土史家にお聞きしたところ、小西さん自身もご祭神の一人として、地元の人に非常に大事にされているそうです。

それから、小西さんが 23 歳の時に書いた日記帳でございます。この年に名前を和太郎から和かなうに改名いたしました。ここで注目していただきたいのが、今、平和の和という字を書いておりますけれども、この日記帳には「珂那夫」と 3 文字で書いていることがお分かりいただけるとと思います。どのような経緯で名前が変化したのか分かりませんが、明治 29 年の頃には「かなう」という名前を使っていたのかも知れません。

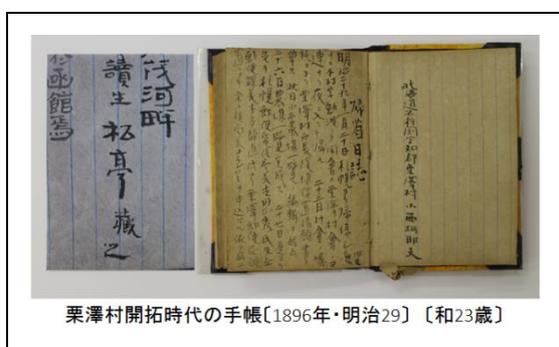
もう一つ、新聞記者になって、「松亭しょうてい」とも名乗るのですけれども、この頃の日記帳に「松亭」という名前が見えます。23 歳の頃にはすでに「松亭」という名前を使っていたということが伺えます。

それから、これがさぬき人物風景に描かれたスケッチでございます。実際に描写をしている日記帳の原画でございます。この日記帳はかなり細かい描写が描かれており、芸術的なセンスを伺えます。

これは小西さんが 24 歳の時の小西農場の開墾の様子でございます。中央に和さん。左端に弟の太郎さんがおられまして、この 2 人で小西農場を頑張って経営していたことが窺えます。



小西神社（撮影 佐々木明美氏）



栗澤村開拓時代の手帳〔1896年・明治29〕〔和23歳〕



手帳に描かれたスケッチ



小西第一農場新墾 1897年 中央和 左舎弟太郎  
小西農場開墾の様子〔1897年・明治30〕〔和24歳〕

小西さんが 24 歳の時にお父さんが亡くなります。そのお父さんの亡くなったことに対するお見舞いが東京に住む渡辺さんという方から送られてきた手紙でございます。この資料は、この頃、小西さんが栗沢村に住んでいたということを示しております。



栗沢村に届いた小西和宛ての書簡[1897年・明治30]〔和24歳〕

これが奥さんと写された写真でございます。奥さんは治子さんという東京の方です。小西さんが 26 歳の時、小西農場を経営する傍ら、上京して東京でやりとりするのですが、その時に泊まった近くに奥さんが住んでいたということで、猛烈にアタックして口説き、北海道で一緒に住むようになったということでございます。



妻 治子との写真[1899年・明治32]〔和26歳〕

これは小西さんが 27 歳の時に作られた年中帳寶という、今でいう暦です。

これも佐々木さんから提供頂いた写真ですけれども、小西さんが栗沢村で過ごした屋敷跡でございます。この時は勲 4 等を受賞しています。最終的に勲 3 等を受賞しているので、勲 4 等を受賞された大正 5 年から勲 3 等を受賞された昭和 3 年までの間に、この石碑が作られたということが考えられます。



年中重寶[1900年・明治33]〔和27歳〕

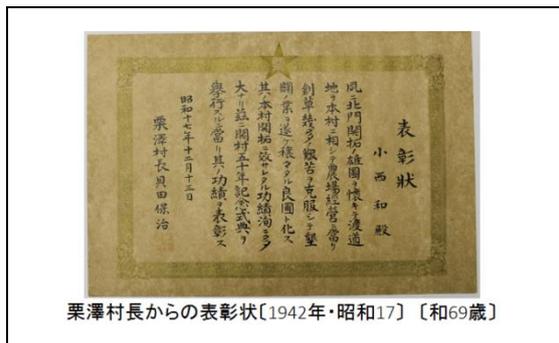


栗沢村で過ごした屋敷跡 (撮影 佐々木明美氏)



勲四等受章[1916年・大正5]〔和43歳〕

それから、栗沢村が開村 50 周年にあたる年、小西さんが 69 歳の時ですけれども、昭和 17 年に栗沢村長から開拓の功績を称えるということで表彰されております。途中、挫折をしましたがけれども、北海道開拓の功績が後の人達にも称えられているということを示す貴重な資料です。

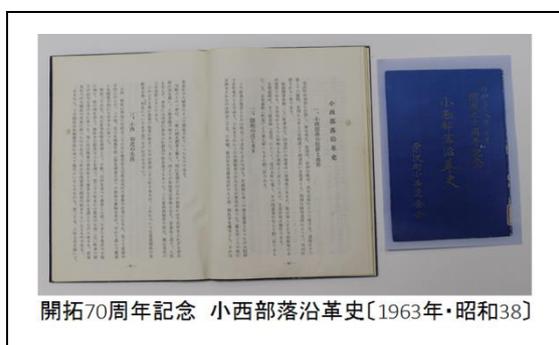


栗澤村長からの表彰状[1942年・昭和17]【和69歳】

また、農業秘録という書物にも文化の先端を行った小西和ということで紹介されております。さらに、小西部落の沿革史にも開拓の始まりということで、小西さんが開拓をされていたということが書かれております。



北海道農業秘録[1942年・昭和17]【和69歳】



開拓70周年記念 小西部落沿革史[1963年・昭和38]

## 第2章 ジャーナリストとして再生を誓う

次の第2章はジャーナリストとして再生を誓うということでございます。

小西さんは北海道の開拓に挫折した後、東京の奥さんの実家に身を寄せ、臨時職員として東京市役所に勤務されます。その傍ら、自分の絵画を売って生活をしていくという日々が続きます。その中で、朝日新聞社の社長に自分で手紙を出します。自分を記者として採用してほしいという手紙です。

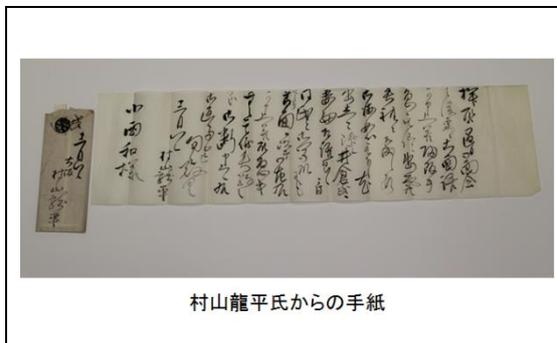
用してほしいという手紙です。

そして、朝日新聞社の社長と面接をして採用されます。そのあと 1904 年、日露戦争中に社長から指示を受けて、特命の記者として満州に渡ります。当時は日本が北方の開拓をいろいろ計画していた頃に当たりますので、戦況報告をすると同時に満州の地質構造や、自然環境などの調査を兼ねた従軍記者として満州に渡ります。

- 1901年(明治34)【28歳】 東京市役所へ勤務
- 1903年(明治36)【30歳】 東京朝日新聞社入社、編集局学芸部付記者となる
- 1904年(明治37)【31歳】 日露戦争に村山龍平社長の特命で従軍記者として満州に渡る
- 1905年(明治38)【32歳】 日露講和により帰国。社より1年間の慰労休暇と特別賞与を受ける

翌年、日露講和によって帰国し、1年間の慰労休暇と特別賞与の2千円をいただきます。特別賞与の2千円は今のお金に直しますと、260万円ぐらいになるそうです。小西さんはそのお金を瀬戸内海の研究費に充て、研究成果として瀬戸内海論を執筆します。

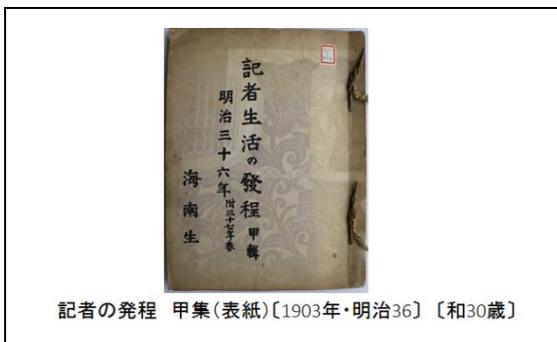
これが村山龍平氏からの手紙でございます。この手紙の内容は「もう一度会いたい」というものです。「時間がなくて、面接の途中で失礼をして申し訳なかった」というようなことが書かれています。面接の後の社長からの返事だと窺える手紙でございます。



村山龍平氏からの手紙

この写真は小西さんが新聞記者として新聞記事を発表していくのですが、それを自分自身がスクラップとして綴っていく、最初のスクラップ帳の表紙でございます。

その中で注目されるのが、土用入りの天候図です。小西さんが30歳の時に作られました。今の新聞は「天気予報」を普通に見ることができますけれども、当時、そういう天候図を新聞で見るという機会がありませんでした。朝日新聞社の中で、最初に小西さんのアイデアで取り入れたということが言われております。もしかするとすると、新聞記事の中に天候図を入れたのは、小西さんが全国で最初かも知れないということです。そのあたりについては、今後、いろいろと資料を調べていきたいと思っております。

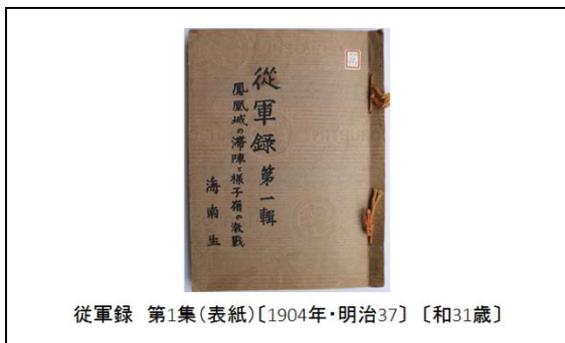


記者の発程 甲集(表紙)[1903年・明治36] [和30歳]



土用入りの天候図[1903年・明治36] [和30歳]

これが小西さん31歳の時の従軍録の表紙でございます。このように戦況報告を書いているのですが、イラストの名前が特派員、松亭生となっていますね。松亭というように名乗っております。



従軍録 第1集(表紙)[1904年・明治37] [和31歳]

こちらの記事の文章は小西海南、絵は松亭ということで、朝日新聞社に2人いるようなことが、当時、言われていたようで、一人二役の大活躍をしている様子が伺えます。



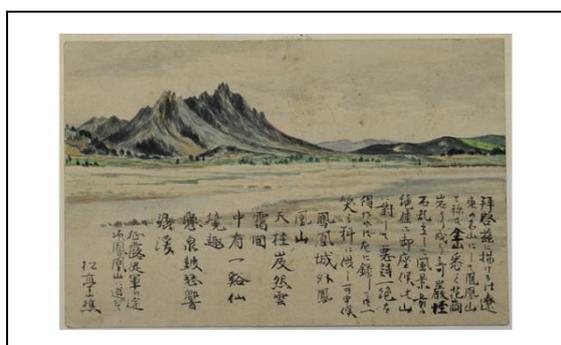
日露戦争の掲載記事[1904年・明治37]【和31歳】



これは小西さんが31歳の時に治子さんに宛てて送った絵葉書でございます。当時からカラーで、ご自身が書いたものです。これはその一部ですけど、松亭と書いております。



小西 和が送付した絵はがき[1904年・明治37]【和31歳】



こちらについても松亭と名乗っております。非常に細かい所まで描写しているということで、貴重な資料になっております。

これは小西さんが30歳から38歳の間の新聞記者として活躍した時のスクラップ帳です。ご自身の記録をこのようにスクラップ帳に残しております。これらは小西さんを偲ぶ貴重な資料となっております。



執筆した記事のスクラップ帳[1903~11・明治36~44]【和30~38歳】

### 第3章 瀬戸内海の研究に没頭

第3章は、瀬戸内海の研究への没頭です。先ほど申しました1年間の慰労休暇と特別賞与を頂いた小西さんは2つの刊行物を刊行しております。一つは日本の高山植物、それか

1906年(明治39)【33歳】「日本の高山植物」刊行  
1911年(明治44)【38歳】「瀬戸内海論」刊行

らもう一つは明治45年に瀬戸内海論を刊行しております。

これは小西さんが33歳の時に書いた日本の高山植物の表紙でございます。中はこのように高山植物のイラストです。植物についての詳細な報告がされております。



「日本の高山植物」刊行【1906年・明治39】【和33歳】



「日本の高山植物」挿図

小西さんが37歳の頃、丁度、瀬戸内海論を発行する1年前ですけれども、治子さんは伊豆の方に住んでいたようでございます。その治子さんから小西さんに手紙が送られております。「いろいろ家事等について心配しなくて良いですよ」というようなことが書かれておまして、治子さんの内助の功が窺えます。



治子からの手紙【1910年・明治43】【和37歳】

そして、小西さんが38歳の年、明治44年12月8日に海洋新聞において、「小西和先生の瀬戸内海論」ということで、瀬戸内海の紹介が刊行されました。千ページに亘る瀬戸内海を考える上での総合辞書というような内容になっております。地質の構造であったり、海岸線であったり、瀬戸内海を総合的に考えた内容を発表されております。



海洋新聞【1911年・明治44】【和38歳】

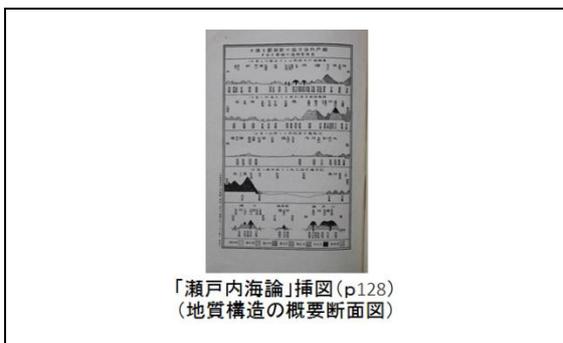


**瀬戸内海論 目次**

- 第1 瀬戸内海とは如何
- 第2 瀬戸内海の構造
- 第3 地表と地質と土性
- 第4 沿岸の山河と湖沼
- 第5 瀬戸内海の海岸線
- 第6 瀬戸内海の港湾
- 第8 内海の広狭と深浅
- 第9 瀬戸内海の湖水
- 第11 海陸の生物と産業
- 第13 瀬戸内海と人生
- 第14 瀬戸内海の前途は如何

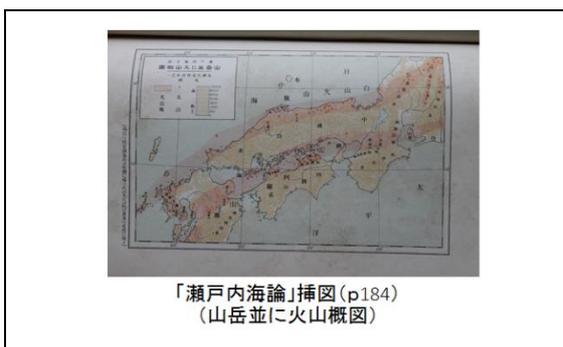
これが瀬戸内海論の挿図でございます。丸亀の塩飽諸島からの海の断面図をこのように挿図として残しております。

これは地質構造の概要断面図ということで、岩石の名前をも研究されて、地質構造を調査された跡が伺えます。



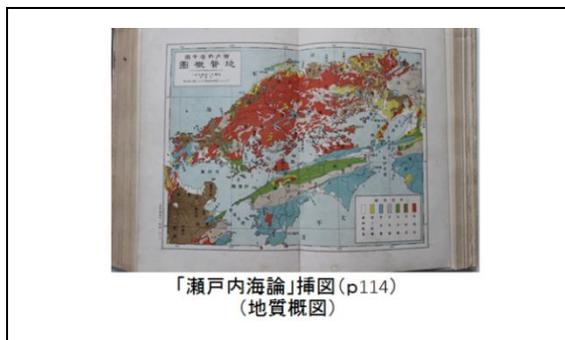
これが山岳ならびに火山の概図でございます。

これが瀬戸内海の海峡の海の深さを示すものでございます。



これが地質の概図です。

これが潮流を示す挿図です。



このように瀬戸内海をあらゆる角度から研究された書物が発行されまして、この書物は後の人達にも語り継がれております。小西さんが亡くなられて 26 年後の昭和 48 年に復刻版として瀬戸内海論が発行されております。平成に入りまして、小西さんが亡くなられて 51 年経ちますけれども、平成 10 年に阿津秋良先生によって口訳された瀬戸内海論が発行されております。このように小西さんの考えは、後世の人達によっても語り継がれております。



## 第4章 国会議員としての使命

次に第 4 章として、国会議員としての使命でございます。小西さんは瀬戸内海を国立公園にしたという功績を称えられておりますけれども、具体的な内容について、私自身、あまり良く分かっておりませんので、一覧表にまとめてみました。

小西さんは国会議員として、7 回当選されております。年齢にいたしますと 39 歳から 63 歳までの間、活躍されております。政党は立憲国民党、中正会、憲政会、それから立憲民政党に所属して活躍されました。

国会等で提案した主な議題等ですが、最初に当選された年の大正 2 年の国会において、「海洋調査機関に関する建議案」を提案されております。

黄色の部分ですが、瀬戸内海国立公園に結び付く内容

当選	衆議院	西暦(元号)	年齢	所属政党	国会で提案した主な議題等
1回目	第11回	1912年(大正元)	39	立憲国民党	海洋調査機関設置に関する建議案〔1913年(大正2)〕
2回目	第12回	1915年(大正4)	42	中正会	海洋調査及び研究機関設備に関する建議案〔1915年(大正4)〕
3回目	第13回	1917年(大正6)	44	憲政会	・四国海岸循環鉄道建設に関する建議案〔1918年(大正7)〕 ・外客の招致及待遇に関する建議案〔1919年(大正8)〕 ・名勝旧跡その他著しき事歴ある樹石並特殊の植物保存及利用に関する建議案〔1919年(大正8)〕
		1921年(大正10)	48		・東京朝日新聞、大阪朝日新聞、香川新報紙上で瀬戸内海を国立公園にすべき内容を連載
4回目	第15回	1924年(大正13)	51	憲政会	・国立公園調査に関する建議案〔1925年(大正14)〕 ・海洋調査機関整備に関する建議案〔1927年(昭和2)〕
5回目	第16回	1928年(昭和3)	55	立憲民政党	・国際会議出席(6~11月) ・小豆島及び屋島を中心とする瀬戸内海国立公園設定に関する建議〔1929年(昭和4)〕
6回目	第17回	1930年(昭和5)	57	立憲民政党	国立公園法制定〔1931年(昭和6)〕 瀬戸内海、雲仙、霧島 国立公園第1号指定〔1934年(昭和9)3月〕
7回目	第19回	1936年(昭和11)	63	立憲民政党	
引退		1937年(昭和12)	64	#	

でございます。その中で、第 3 回目に当選した年、大正 8 年の国会で、「外客の招致および待遇に関する建議案」を提唱されます。これは、もっと外国人を呼んで外貨を稼いで、日本がもっと豊かになるために日本の資源を有効に活用してはどうかというような内容です。今、富士山が世界遺産になっておりますけれども、世界遺産となる富士山と、それから瀬戸内海が非常に貴重なものであり、これを世界にもっともっと知らせて行こうではないかというようなことが書かれています。

第 4 回目の時には、「国立公園調査に関する建議案」ということで提案されております。その前の大正 10 年ですけれども、小西さんが 48 歳の時に、新聞紙上で瀬戸内海を国立公園にすべきであるという内容を提唱されています。その時は丁度選挙に落選して、国会議員ではありませんでしたが、小西和として新聞紙上に投稿して、瀬戸内海を国立公園にすべきであるということを訴えております。この頃、瀬戸内海を含む国立公園をどこにしようかというような国の動きがあった中で、国立公園に向けて瀬戸内海を前面に押し出すための小西さんの想いといたしますか、当時、政治家でなくても、瀬戸内海の価値を訴えたいということで実際に活動されていることが窺えます。

その後、4回、5回、6回目も、他にもいろいろ建議していく中で、6回目の当選の昭和 5 年、1931 年によく国立公園法が制定されます。そして、その後の 1934 年、昭和 9 年の 3 月に瀬戸内海と雲仙、霧島が国立公園の第 1 号として指定を受けることができました。ただ、その年も選挙に落選して、結果的に見れば、国会議員として目の目を見るのがなかったのですけれども、その前の年の 6 回目に国立公園法が制定されています。そして、1936 年に 7 回目の当選をし、その翌年に引退されました。

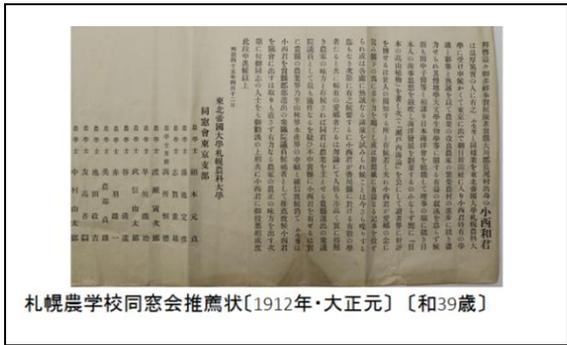
こうしてみますと、小西さんは、瀬戸内海を国立公園にするために政治生命をかけ、そして瀬戸内海が国立公園になった後に引退されていることが分かり、まさに瀬戸内海を国立公園にするために、国会議員としてご尽力されたということが改めて窺えます。

これが 39 歳の時に小西さんが同窓会から頂いた推薦状でございます。札幌農学校の同窓会の皆様から推薦して頂いた推薦状でございます。先ほど申し上げましたように中途退学をしておりますけれども、卒業生として皆様方に応援されたということが窺えます。

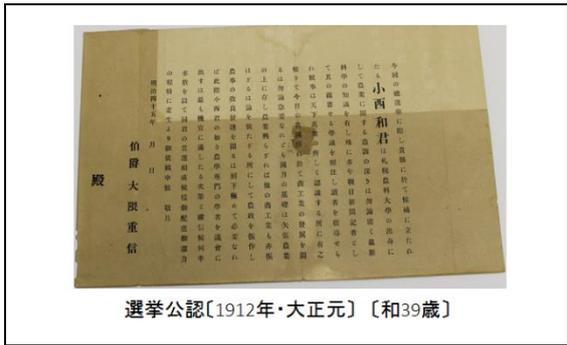
これは小西さんが最初に選挙公認をいただいた時に、大隈重信さんからいただいた推薦状でございます。

犬養毅さんからも書簡が送られています。「体調が悪くて温泉療養をしているので、ぼちぼちやります」という犬養さんから小西さんに宛てたものでございます。

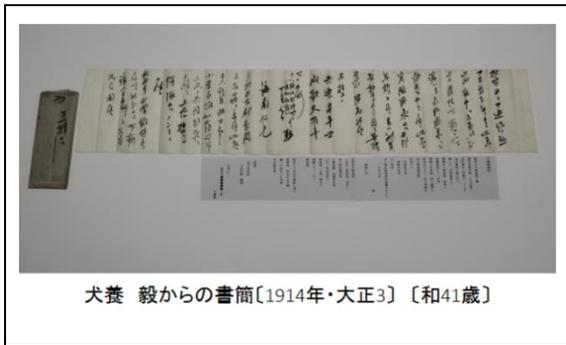
これは、大正 4 年に写した小西さんご自身の写真です。議会の様子と合わせて、ご遺族から提供していただきました。



札幌農学校同窓会推薦状【1912年・大正元】【和39歳】



選挙公認【1912年・大正元】【和39歳】



犬養 毅からの書簡【1914年・大正3】【和41歳】



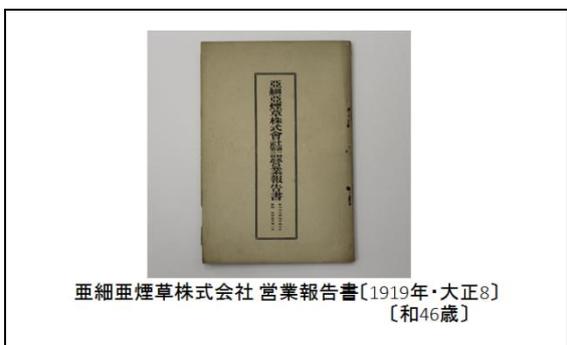
肖像写真と衆議院議会の様子【1915年・大正4】【和42歳】

これが帝国議会の衆議院議員報告でございます。

これは大正 8 年、小西さんが 46 歳の頃の会社の営業報告書でございます。小西さんは政治家と同時に実業家としても活躍されておられます。



帝国議会 衆議院報告【1915～24・大正4～13】  
【和42～51歳】



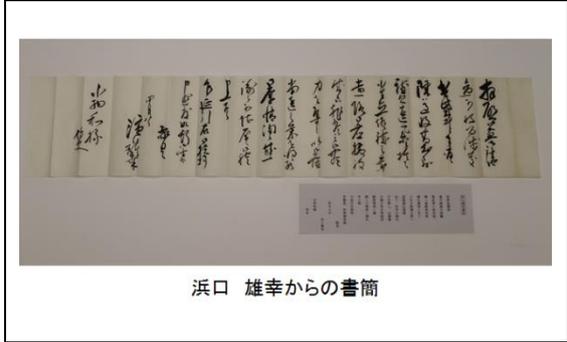
垂細亜煙草株式会社 営業報告書【1919年・大正8】  
【和46歳】

これは浜口雄幸さんからの書簡で、小西さんが選挙の応援に行かれた時のお礼が記されています。

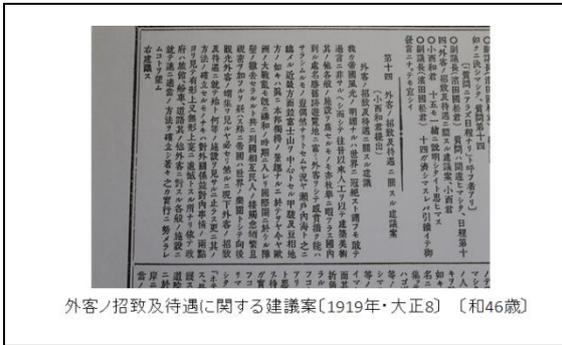
これは先ほど申しました大正8年に、小西さんが最初に瀬戸内海を取り上げた「外客の招致及待遇に関する建議案」でございます。

「これ瀬戸内海および富士山の景色がごときは、実に世界に無類、我が国独特のものとしてよろしいのであります」と書かれています。

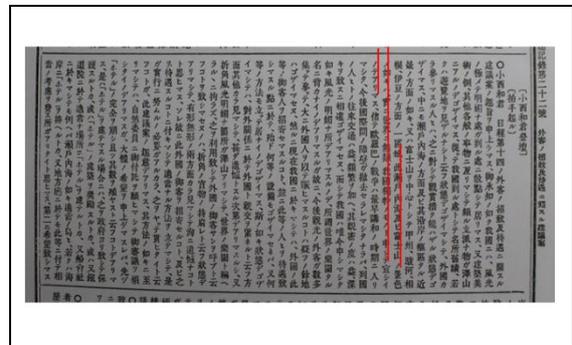
富士山は3年前だと思いますが、世界遺産に登録されました。そのくらい小西さんの先見の明といいますか、大正時代に、このように瀬戸内海を評価しているということでございます。



浜口 雄幸からの書簡



外客ノ招致及待遇に関する建議案(1919年・大正8) (和46歳)



これは48歳の時、この時はたまたま国会議員ではなかったのですが、小西和という名前でマスコミに「瀬戸内海を国立公園に」と強く訴えている内容でございます。



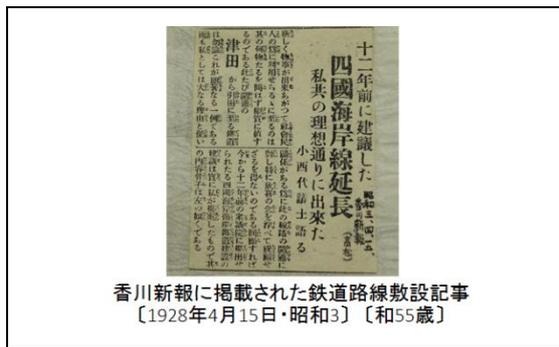
東京朝日新聞・大阪朝日新聞、香川新報に連載された瀬戸内海を国立公園にすべき内容の連載記事2-①(1921年8月・大正10) (和48歳)



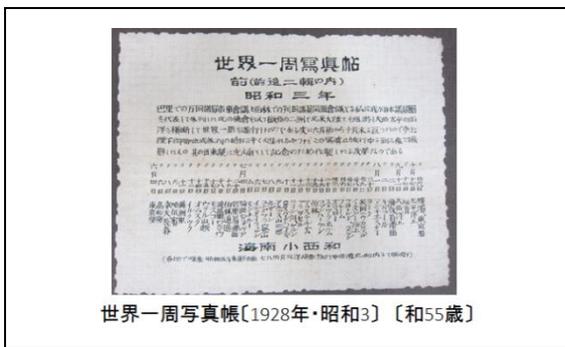
東京朝日新聞・大阪朝日新聞、香川新報に連載された瀬戸内海を国立公園にすべき内容の連載記事2-②(1921年8月・大正10) (和48歳)

それからもう一つ、小西さんの功績です。  
今の JR の路線は海岸線を走っていますが、この路線の敷設に小西さんが関わっていた様子が、この記事から窺えます。

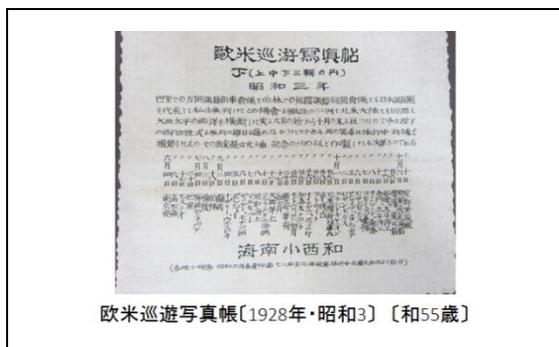
小西さんは昭和3年に国際会議に出席しました。これは、その時の表紙でございます。いろいろ文章が書かれています。6月4日に東京を出発して、10月29日に戻って来るという工程を細かく記録しています。



香川新聞に掲載された鉄道路線敷設記事  
〔1928年4月15日・昭和3〕〔和55歳〕



世界一周写真帳〔1928年・昭和3〕〔和55歳〕



欧米巡遊写真帳〔1928年・昭和3〕〔和55歳〕

これが当時のパリの様子でございます。

それから、これが 55 歳の時に国際会議に出られる小西さんの写真でございます。



世界会議出席〔1928年・昭和3〕〔和55歳〕

これは実際に小西さんが世界一周に持参したトランクでございます。



世界一周時持参したトランク(大・小)

あと、昭和3年に勲三等を受賞されるのですけれども、その勲章と戦争の記事でございます。

それから、小西さんを偲ぶものとして、宇佐神社の境内に桜の碑というものがございす。これは碑を建立した時の写真です。

そして、現在の桜の碑がこちらでございす。



勲三等勲章〔1928年11月・昭和3〕〔和55歳〕  
日露戦争従軍記章(右)〔1905年・明治38頃〕〔和32歳頃〕



宇佐神社境内に建立された「桜の碑」除幕式後の家族写真  
〔1930年(昭和5)6月25日讃岐公論掲載〕〔和 57歳〕



現在の「桜の碑」

昭和5年当時の動きは屋島と小豆島の範囲だけを瀬戸内海としてとらえて行こうというものでした。その後、だんだん岡山の方にも範囲が広がって行きますけれども、これは、当初、屋島と小豆島を中心に考えていたことを示す一つの資料です。

これは瀬戸内海が国立公園に指定される直前、昭和7年の時ですけれども、小西さんと讃岐の主要人物を集めた写真でございます。小西さんがこちらに写っておりまして、ここに書いておりますように小西前代議士ということで、この時には国会議員ではなかったのですけれども、国会議員と同じように讃岐の重要人物ということで小西さんも招かれている様子が窺えます。



「屋島 小豆島を中心とする海上公園(表紙)」  
1930年(昭和5)7月1日発行〔和57歳〕



国立公園法制定後、讃岐公論に掲載された  
座談会の写真〔1932年(昭和7)6月10日〕〔和59歳〕

こちら昭和7年に写された資料でございます。注目は帽子です。小西さんが愛用していたもので、愛用のシルクハットケースとともに、いまだにご遺族が大事にされているものです。



講談倶楽部(雑誌)(東京)に掲載された記事  
【1932年8月1日・昭和7】【和59歳】



愛用のシルクハット、ケース

瀬戸内海が昭和9年に国立公園に指定されましたけれども、小西さんのお亡くなりになられた3年後、昭和25年に当初の範囲が一部拡張され、さらにその6年後の昭和31年に今の範囲になりました、この範囲が非常に広いということで、国立公園の中でも特徴的な公園であるということでございます。



当初の指定範囲【1934年・昭和9】【和61歳】  
(環境省作成パネル)



一次拡張の指定範囲【1950年・昭和25】【和没後3年】  
(環境省作成パネル)



二次拡張の指定範囲【1956年・昭和31】【和没後9年】  
(環境省作成パネル)

これが現在の国立公園のポスターです。



現在の国立公園一覧地図

これは小西さんが引退する時の国会議員の名簿でございます。小西さんの名前が書かれています。

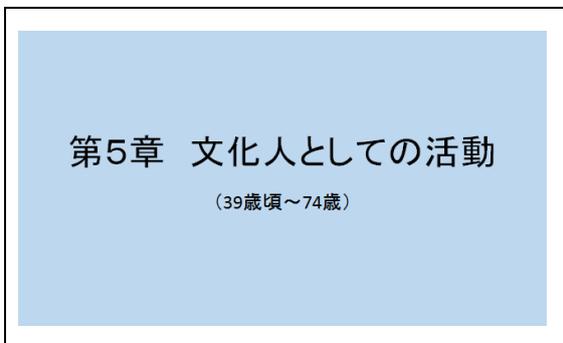
それから、小西さんは国会議員として活躍された時の記録をスクラップ記事として残されております。これらは私たちが小西さんを調査する時の非常に重要な資料であり、とても貴重なものです。



第70回帝国議会衆議院議員名簿[1936年・昭和11] [和63歳]



国会議員時のスクラップ帳[1912～1938・大正元～昭和13] [和39～65歳]



## 第5章 文化人としての活動

(39歳頃～74歳)

次に第5章、文化人としての活動です。小西さんは政治家として活動しましたが、文化人としても様々な活動をされています。

その一つが書道でございます。これは小西さんが愛用していた硯(すずり)と筆でございます。

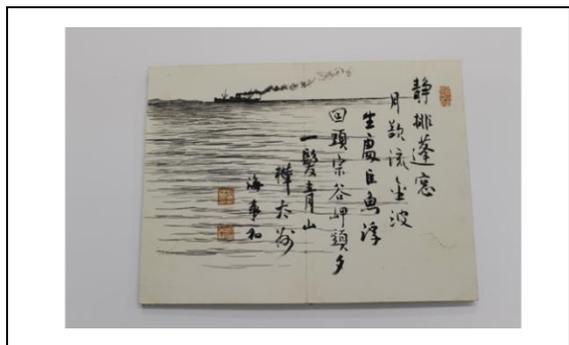
実際に 52 才の頃にも、このような亀鶴帖に文章を残されております。



小西が愛用していた硯・筆



亀鶴帖〔1925年頃・大正14頃〕〔和52歳頃〕



これは小西さんご自身が作ったついででございます。文字を書いた上に彫刻がされております。これは李白の詩を読み込んでおりました、こちらが杜(と)甫(ほ)の詩を読み込んでおります。

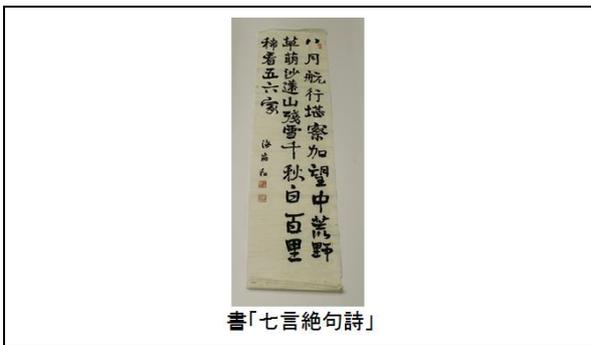


自筆・自刻の衝立(2-1)〔1935年・昭和10〕〔和62歳〕



自筆・自刻の衝立(2-2)〔1935年・昭和10〕〔和62歳〕

これは七言絶句詩という軸でございます。小西さんは書道だけでなく、判を掘る篆刻(てんこく)もされておりました、その篆刻の内容も中国の古典から引っ張ってくるということで、読書の量も多かったということが窺える資料です。



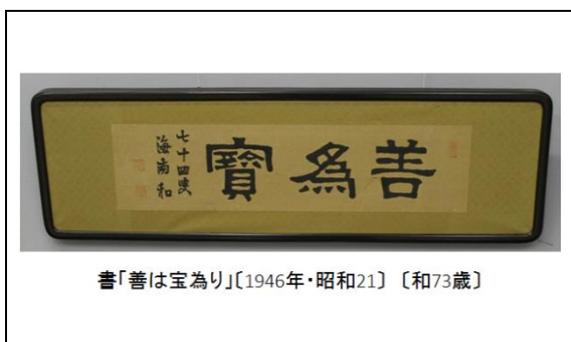
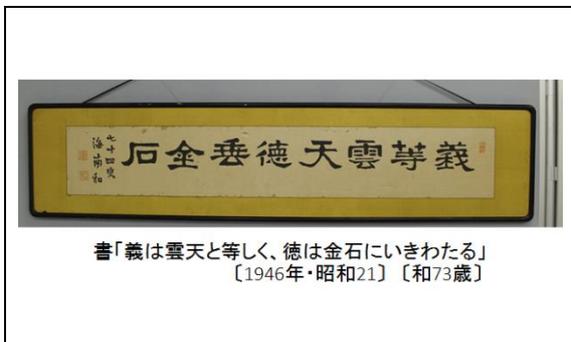
書「七言絶句詩」



七言絶句堅軸、自刻印・陶印

こちらが 73 才の時に書いた「義は雲天と等しく、徳は金石にいきわたる」という作品でございます。

これも同じく 73 才の時の「善は宝なり」という作品でございます。



こちらは 74 才の夏に書かれた「慧(けい)」という作品でございます。小西さんは 74 才の秋に亡くなられたので、その夏に書かれたということで、もしかすると最後の作品かも分かりません。

小西さん自身は漢詩もいろいろ書かれておりました、それをご自身で海南詩稿という 3 冊の本にまとめられております。



小西さんの書道の作品について、毎日書道会の審査会員をされております寒川高校の田淵元博先生に評価をしていただきました。そうしますと、こちらが隷書(れいしよ)、いわゆるお手本でございますけれども、その手本と同じような筆跡が残されております。一見すると簡単そうに見えますが、ここまで同じ字



を書くというのは日々の鍛錬が必要ということです。その田淵先生に評価していただきますと、隸書は、約 2000 年前の中国（漢代）の時に確立された書体で、この隸書を好んで書かれており、隸書の中でも張遷(ちょうせん)碑(ひ)という書体の作品が多く残されているということです。

犬養さんから褒状(ほうじょう)をいただいて、日々鍛錬していたということも資料として残っております。また、書き終わった後、その篆刻(てんこく)の判子も残されており、出展が菜根譚(さいこんたん)であるとか、中国の古典を引用しているということで、読書をかなりされていたということが窺えます。

小西さんの主な功績といたしましては、1 つ目として、政治生命をかけて瀬戸内海を国立公園に導いたということです。2 つ目は北海道開拓の功労者であるということです。それから 3 つ目は究極の文化人であるということです。このように小西さんは非常に幅広い活躍をされたということでございます。

まだまだ小西さんは大きな功績を残されておりますけれども、小西さんの功績の中の一旦を紹介させていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

[本城先生]

本当に豊富な資料で小西和という人物を説明していただいたと思います。

どうぞ、ご質問等がございましたら、また、もっと聞きたいこと等はございませんでしょうか。

[稲田先生]

小西和さんの「瀬戸内海を国立公園にしたい」という推薦理由をいろいろあげていらっしゃいましたが、どのような点が最も瀬戸内海国立公園にふさわしいとお考えになったのでしょうか。

[山本先生]

それにつきまして、小西和さんが瀬戸内海は非常に素晴らしいということを直接感じた契機ですが、日露戦争の従軍記者として、満州に渡り、そこから日本へ向かって帰ってくる船の中のことだと記録されています。瀬戸内海に入るまでは非常に殺風景な同じような



(小西 和 氏)

(主な功績)

- ①政治生命をかけて、瀬戸内海を国立公園に導いた
- ②北海道開拓の功労者
- ③究極の文化人

御清聴ありがとうございました

景色が続いていたのが、瀬戸内海に入った途端、今、評価されている多島美であり、いろいろな景色が楽しめたということです。それと、歴史的にも非常に貴重な遺跡等があるということで、歴史と文化が融合されているところが非常に素晴らしいということ、小西さん自身が言われております。それが小西さんの推薦理由になったと考えております。

[本城先生]

他にございませんでしょうか。はいどうぞ。

[多田先生]

今の質問と関連するのですが、第1章でお話しされた北海道にかける夢というのは、札幌農学校で勉強しているうちに、実際に自分で農場をやりたくなって、農場の経営に関わったのだろうということです。

ところが、農業に失敗し行くところがなくて、とりあえず東京の奥様の実家に行って、朝日新聞の社長に手紙を書いて、自分が持っている知識を生かしたいということで、さっきのお話のロシアからの帰り、日露戦争からの帰りに瀬戸内海の美しさを再認識したという、そこが瀬戸内海研究に入って行った最大の理由だというように理解してよろしいのでしょうか。

[山本先生]

私が調べた中では、それが最大の契機になっているということでございます。

[多田先生]

じゃあ、日露戦争に従軍記者として行かなかったら、恐らく瀬戸内海研究もしなかったかもしれないというような感じなのですね。

[山本先生]

それについては今後も調べて行きたいのですが、今のところそういうようなことだと考えております。

[多田先生]

ありがとうございました。

[本城先生]

他にございませんか。

宇佐神社というのが出てまいりますけども、それは宇佐神宮の関連ですか。

[山本先生]

はい、同じ系列です。

[本城先生]

よろしいでしょうか。どうも先生ありがとうございました。